

# 言語指導の基礎 (四)



——文字の生活と指導——

村 石 昭 三

幼児に文字を教えたらいいではないか、という提案がしばしば聞かれるが、これは幼児が文字をよく知っている、知りがつてもいるし、そして教えれば、結構、覚えられるという幼児の発達の現実が、提案の大きな理由になっているようである。

だいたい、どこの幼稚園でも幼児が絵本を見ながら文字を読むこととに興味をもつのはいつごろからだろうか、と観察するならば、その半数くらいが四歳児からあらわれ、五歳児の半数くらいは絵本を見ているとき、積極的に文字について質問することに気づくことができる。すでに身近な具体物に一応、ことばのレッテルをはることでできて喜びを感じた幼児たちが、さらにその学習を基礎にして身近な具体物に文字のレッテルをはることに興味をもってくるということは、自然な発達の姿であろう。

このように、幼児は文字への興味をもっているのだから、という期待が文字指導の徹底という提案の形ででていているが、同じように小学校でも問題になっている。しかし、小学校の方は学力低下という不満にもとづいての提案なのだから、提案理由が幼稚園と逆なところに皮相なものを感じさせる。

最近、児童心理学では、今の幼児が戦前にくらべていちじるしい発達の現実を、発達の加速度現象とよんで問題にしているが、文字生活へのいちじるしい接近もその例外ではないであろう。それでは、どうして文字が幼児の生活に入ってくるようになったか、その原因をさぐればいろいろあるにちがいない。たとえば、文字の生活に接近できるだけの身心の成熟が早目にできあがっているということがある。幼児のからだの成熟は年々、向上している。だいたい、

ものの本にでてゐる数年前の發育標準は今の幼児にはあてはまらないもので、標準でなく、最低基準とみた方がよい。これは、日本人全体の生活が向上し、乳幼児期の發育が科学的に、合理化されてきたということであろうが、生活の向上は幼児の心の發達が促進されたとということの方にも反映している。むしろそれはからだの發達より重要なことであろう。

つぎは、教育環境が向上したということであろう。家庭での生活が教育的になつてきたこと、幼稚園の指導が非常に進歩したことである。もつとも、一部の幼稚園ではわるい意味であまりに小学校的になりすぎているきらいがあり、文字ということばの要素を教えることだけがことばの力をつけることだ、という誤まつた考えによることもあるが、ともかくそれが幼児を文字に接近させていることだけは確かである。そして、最後にはマス・コミュニケーションの發達ということがある。幼稚園では、「キングダーブック」「よいこのくに」「チャイルドブック」など月刊絵本を園として購入し、また幼児に購入させており、それらをとおして幼児はいろいろな文字にふれ、経験をましている。最近の絵本には文字の占める割合がふえているが、そのような絵本が幼児の世界にマス・コミュニケーションの機能を發揮するためには、幼児のすべてが文字を知つてゐるといふ、いわゆるユニバーサル・リテラシーが必要なのである。この

ために、マス・コミュニケーション自体が、幼児に文字に接近することを要求しているわけである。

このようなわけで、幼児の發達ということを考える人たちは、幼児に文字を教えないということに二様に不満を感じるものである。しかし、文字を教えることは教育する、保育するという仕事である。この立場からすれば、文字を教えることのほかに、もつと重要なこととはなにか、幼児にとって文字を知ることが、どのように幼児の生活に意味をもつてくるか、という文字の生活機能を正しく位置づける必要がでてくる。したがって、幼児の生活に必要なかぎりにおいて、文字にふれさせなければならぬだろうし、それも文字の學習を受けるだけのほかの成熟をみきわめた上で与えられるべきだ、という線がでてくる。

文字の學習には、いつもレディネスということがいわれるが、それは文字を學習するに必要な知的な成熟、視覚、聴覚、手・指の運動機能、話しことば、経験が準備できていることをさす。文字を読むレディネスがつくのは精神年齢が満六歳六か月ごろであるといわれている。これは知能が年齢相当に發達している子どもならば、だいたい、小学校の入門期に相当するわけであるが、六歳六か月という線は、組織的に読みの學習指導ができる年齢であつて、文字は絵や図形とちがつて、記号であるが、文字に興味をもつことができる

のは満五歳半で十分である。そのような読みのレディネスはその時期につきし、文字を書くことのレディネスもそろそろ身につく時期である。もっとも、組織的な書くことの学習指導ができるレディネスということでは、七歳の声を聞かないとできないといわれている。

したがって、すでにレディネスのついたひとりひとりの幼児については、個別的に文字を教える必要があるものである。自分の名前が読める、書けるということは、集団生活に容易にとけこむことができるささえになり、すでに獲得した話しことばをたしかめることができる。また、絵をみることから読むことへの興味をまし、抽象的な思考ができるようになる。しかし、文字のレディネスは個人差が大きいため、レディネスのついていない幼児には無理に教えることはさけないものである。無理に教える、覚えないうし、逆読みをしたり、まちがった筆順で書くし、それが小学校の学習にいつまでも残ってなおらなかつたりして、さらには学習全体への興味を失なわせることにもなりかねないものである。

さて、前にも述べたように、文字は幼児の生活に必要なかぎりにおいてふれさせなければならぬものであるが、生活の必要をぬきにして、四六字のうちどれから、ということを決めることはできない。しかし、幼児ひとりひとりについては特定の必要な文字があ

る。自分の名前、おとうさん、おかあさんの名前である。名前のうちでも、姓と名とにわければ、姓の方はずっと後にしてよいであろう。自分の名前が文字で書かれたものを知るのには、よく目に触れるということのためよりも、むしろ、鏡に自分の姿を投影して喜ぶと同じりくつで、文字化された自分を喜ぶ心理に似ている。

幼児は文字化されたものを知識として獲得するというより、話しことばとして身につけたことばを文字化したり、具体的な事物を文字化したりする、いわゆることばのレットルはりの喜びをもつ。その点で、話しことばとして使っていないことばの文字を覚えるなり、知らない事物を音だけにたよって文字を読み・書きする興味はないし、しても覚えられないものである。

もっとも、文字にはやさしいものと、むずかしいものとある。やさしい文字というものは、字形の簡単なもの、たびたび幼児の生活の基本的な場の中で使われるものである。特徴ある字もよい。たとえば、へお、こい、しんは読みやすく、へほ、ぬんなどは読みにくい。それにしても、それらの文字が語としてできあがり、幼児の生活に身近な、知った事物やことばでなければならぬことが基本である。

文字を書くことは、読むこと、認知することよりおくれる。だいたい、書ける字は読める字よりも二割がた少ない、というのが一般である。これは小学校になっても変わらない。

文字の数は全部で四六である。濁音・半濁音を合わせ、漢字などを合わせていけば相当な数になるけれども、一応、四六文字という線を幼児の学習対象とすることができる。そして一般に、幼児が何字読み・書きができるかということが文字力と考えられているむきがあるけれども、幼児の生活に生きて働く力というものは、基本的な文字の生活に適応できること、文字ことばで考える態度や習慣がつくという立場で考えるならば、幼児が何字が読み・書きできるか、などということは意味のないことである。

このように、文字力を幼児の生活に生きて働く力と考えるならば、文字を覚えさせて喜びを与えるといった個人的な満足を与えることとともに、集団生活の必要から文字を覚えさせる必要がでてくる。まず、事物を指示する文字がある。幼児ひとりひとりがついているものにつけられ、また、みな共通の園の入口、出口、便所の文字などである。このようなものは幼児の集団生活においてぜひとも皆が知っていてほしいものである。これは文字が読めるというよりも、それがどんな事物をさすか気づかせる、認知させることである。公園に行ったり、乗物に乗ったときにもこのような文字の必要性を意識することができる。自分のもちものが、名前を書いた文字からみつめることができる、そして他人のもちものも、その色や形や中味を調べなくともわかる。先生が板書する曜日、当番、

欠席者の名前などがわかることは望ましいものである。

幼児の生活のなかで、文字がよくあらわれるものは絵本である。幼児の目にふれる絵本は文字が付随的にでているのがふつうであるが、中には文字が主になっているものもある。幼児は文字を十分に読むことができないのだから、文字が主になった絵本は満足すべきものではない。それは読み手であるおとなのために設けられたもので、幼児のためではないけれども、幼児のためにあるものとすれば、それは、絵の中味を文字が代用することを自覚させ、それによって、幼児の自由な表現創作をさせるといふ効果を期待できなくはない。その場合、幼児の話すじは変わるけれども、別にいいとか、悪いとかいうことでなく、いろいろ文字を正しく読ませようとして、読み誤まりを正すことは意味のないことである。読み手であるおとなのための文字ということでも、それを聞きながら幼児は絵本を読む力を深めることができる。

絵本の絵をみることから、絵本を読むことへ、そして絵本の文字を読むという段階は、幼児が絵本に接近し、文字の生活に入る自然な発達の姿である。願わくば、絵本に書かれた文章が、よく幼児の絵をみつめる心性の目と一致したものであることを望みたいものである。